［二〇一七年度大会パネルセッション］

カミとホトケの幕末維新——交錯する宗教世界——

桐原健真　青野　誠
上野大輔　林　淳

趣旨説明

（桐原健真）

本パネルセッションは、先行研究自体の言説史的把握をふまえ、幕末維新期の思想状況を宗教面から再検討するものである。これまでの当該期に関する歴史学的な成果は、もっぱら政治史が主であり、また文化史の側面でも進歩史観的な「文明開化」論が中心であった。しかしながら、近年、明治期の思想状況は実際には漢洋並進であり、漢学の社会的重要性が近世以上に向上していたことが指摘される。こうした事実は、単なる「文明開化＝西洋化」或いは「近代化＝善」という図式の見直しを促すものでもあろう。この点で、今日、明治の宗教者がみずからを近代化させていったという「物語」についても、再考が求められていると言ってよい。

もとより宗教社会史では、近世の「民衆宗教」に関する分厚い研究蓄積が存在し、また近年でも「近代仏教」という新たな視座からの議論が現れている。しかしながらこの両者のあいだは必ずしも学問的な連携を実現し得ていないのが実際である。それは、政治史を基調とした近世—近代という語りに由来する一つの弊害でもあっただろう。

本パネルセッションは、ときに政治史に従属するかたちで叙述されてきた幕末維新期の宗教世界を近世と近代とを架橋する時代として描き出し、当該期に生きた宗教者や思

想家たちがいかに認識し、行動したのかを検討するものである。と、同時に、これまで当然のように使われてきた概念――「尊王攘夷」「民衆」「神仏分離」などなど――について、その始原や言説論的展開を明らかにしていくことで、当該期の思想史・宗教史の枠組みを改めて問い直していくことをもその主たる目的としている。

なお本パネルは、明治一五〇年に併せて刊行予定の同名編著における成果の一つでもある。この試みにより、これからの幕末維新期における思想・宗教・文化研究に新たな地平が拓かれることを願う次第である。

すべては「排耶」から――幕末維新の宗教空間における水戸学の位相

（桐原健真）

しばしば後期水戸学の神道論や国体論が明治国家に大きな影響を与えたと言われる。だが水戸学の諸要素が明治国家に再利用されたことは確かだが、水戸学が天皇制イデオロギーを導いたわけではない。こうした論理の逆転は、水戸学に対する語りが明治国家との連関で展開されてきたことに起因する。本報告は、幕末期に存在した水戸学の思想構造を問うことを通して、その明治国家に対する射程をも再検討するものである。

水戸学を実践的に主導した藩主徳川斉昭の言動をみるかぎり、排仏や神儒一致などの主張が本当にその目的であったかには疑問符を付けざるを得ない。それは、水戸学が結局は幕藩体制護持のイデオロギーでしかなかったと言われる所以でもある。しかし水戸学における「排耶」言説は、決して単なるレトリックに留まらず、その世界観や体制認識を支える基礎でもあった。本報告は「耶蘇」との対峙こそが後期水戸学における主要な課題であったことを指摘し、その意味を明らかにすることを目指すものである。

「民衆宗教」概念の形成と変容

（青野誠）

本報告は、「民衆宗教」という概念がいかに形成され、その後どのように変遷していったのか。そしてこうした概念が生み出された時代背景について考察したものである。具体的には村上重良・安丸良夫・小沢浩・神田秀雄・桂島宣弘の各研究者がどのように「民衆宗教」について論じてきたかについて比較検討を試みた。

村上は「民衆宗教」がいかに国家神道の圧力を受け、統制の下に屈服してきたかという点に主眼を当てた。これは「民衆」が超越者と結びつくことで救済を求めながらも、そうした救済願望が国家神道・天皇制イデオロギーに回収されていく経緯を描いたものである。その背景には靖国神

社国営化・政教分離違憲訴訟という現代の政治と宗教に関する危機感があり、その問題性の自覚を広く社会に訴えていこうとする目的があった。

安丸は「民衆」が革命主体とはなりえず、最終的に天皇制イデオロギーに迎合していくという幕末維新期における思想的限界を認めつつも、彼らが国家権力の統制に対抗し主体形成をしていく可能性を描き出した。これは教祖という一人の「民衆」の思想形成に着目することで国家権力への抵抗を見出し、そこに希望を見出したものだったといえる。この背景には六〇年代後半から七〇年代にかけての近代化論の流行と国家主義の台頭があり、それに抵抗する社会運動への関心があった。

このように村上と安丸は、国家と「民衆」の対立という構図は共有されていたが、そこに込められた問題意識と「民衆」への視点は相違したものであった。村上は国家神道により弾圧される教団に着目したのであり、「民衆」は集団として捉えられた。対して安丸は、教祖という個人の思想形成に着目することで「民衆」を個として描いたのである。両者ともに当初の「民衆宗教」概念は曖昧なものであったが、七〇年代の社会変容を背景として今日までの原型が形づくられた。

近年の研究においては、「民衆」概念が希薄化して中心的課題でなくなった影響もあり、国家権力への対抗が念頭に置かれつつ、より多角的な視点からの検討が進められている。

小沢は「生き神」という神の性格に着目することによって、幕末維新期の「民衆」における自己解放思想のひとつの到達点だと論じた。そしてこうした「生き神」と「現人神」が対極的な存在であるとして、「民衆宗教」がもっとも先鋭的に天皇制イデオロギーに対抗する理論を有していたものだとみなした。

神田は、「民衆宗教」とは教祖の教説のみで成り立っているのではなく、信者の意識や活動を反映させながら存在していることを重視し、信者たちの思想へ注目した。また、「民衆宗教」が成立した幕末維新期という時代の特有性を重視すべきだとして、国民国家形成期における宗教的共同体の存在意義を論じた。

桂島は、信者のみならず、「民衆宗教」に反対していた人びとにまで視点を広げることで、幕末維新期の社会のなかで「民衆宗教」をどこに位置づけるかを模索した。その上で従来の「民衆宗教」研究が重視してきた、一神教的な最高神という主神の性格が近代化論に規定されているのではないかという問題を提起したのであった。

こうした、教祖と信者の、教団内と教団外の相互関係と

いう多角的な視点によって、幕末維新という時代においての「民衆宗教」の意義づけをより明確にしようという取り組みが進められている。オウム真理教などの新興宗教の勃興や、スピリチュアルブームといった人びとの精神世界への関心がこれらの研究動向に影響を及ぼしたことは間違いないだろう。さらには宗教学の立場からの「新宗教」研究との応答も影響していよう。

こうした「民衆宗教」概念の変容からは、どの時代においても国家による宗教統制への対抗軸として「民衆宗教」が語られていることがわかる。「民衆宗教」がなされてきたのは、その時々の現代社会において、国家と宗教と人びとの関係性を考えなければならない問題が存在していたためだと考えられる。固有のイデオロギーに基づく歴史観を唯一のものにしないために「民衆」という視点は絶えず再生産されたのである。「民衆宗教」概念の形成と変容の歴史は、現代社会における歴史観の画一化に抵抗し、相対化する視点を持つことの重要性を私たちに語りかけているのである。

神仏分離研究の視角をめぐって

（上野大輔）

本報告では、「神に関する事物と仏に関する事物を分け

て離す」という意味で神仏分離を解し、研究史と関連史料を踏まえて今後の研究の視角を提起すると共に、近代化過程における神仏分離の位置づけにも論及した。

明治維新期の神仏分離については、まず仏教史と関わる調査・研究蓄積が注目される。一九二〇年代後半には『明治維新神仏分離史料』が刊行された。仏教史と関わる議論では、「廃仏毀釈」と繋げた把握がなされ、神仏習合も視野に収められていることが確認できる。この議論は、後の諸研究に影響を及ぼしていった。

一九七〇年代後半の安丸良夫の研究により、近代天皇制国家の支配体制と民衆との葛藤が宗教の側面から照射されたが、それを一つの契機として一九八〇年代以降、近代史や神道史の立場からの取り組みが大きく進展した。神道史の立場から、神仏習合の転換や「廃仏毀釈」といった事柄自体が再検討されたことは、重要な成果と思われる。

神仏分離を「廃仏毀釈」や「仏教抑圧」と繋げた議論は、それが依拠する神社関係法令の文面と必ずしも合致していない。神社から仏教的要素を除く法令が注目され、寺院から神道的要素を除くことなどを命じた寺院関係法令は取り上げられない場合がある。その意味では、偏った議論となっている。こうした点を踏まえると、仏教にとっての法難史観的な議論の相対化（否定ではない）が、神仏分離研究に

は求められよう。

また、明治維新（神仏判然令）から神仏分離で、それ以前は神仏習合という過度な単純化がしばしばなされ、これに対し、それ以前も分離していたことや、多様な分離があったことが主張される場合もある。ところが、これらの議論は、次に挙げる分析事項を必ずしも踏まえておらず、更なる検討の余地を残している。

分析事項の第一は、神仏分離をめぐる諸主体である。すなわち、それぞれ一枚岩でなく、相互に関係し合う政府・寺社・住民の内の、どの主体の動向なのかを区別して、分析を進める必要がある。

第二は、分離の対象である。施設（寺社）・人（宗教者）・モノ（神仏像・典籍など）は法令上でも区別されており、何の分離が問題となっているかを踏まえて検討する必要がある。

第三は、分離のレベルである。制度上の分離なのか、空間的な分離なのか、特定の言葉の禁止など用語上の問題なのか、或いは思想（信仰）の中身に踏み込んだ問題なのか、といった様々なレベルに注意する必要があろう。

加えて第四に、神仏分離の時期差・時代差の問題もある。慶応四年（一八六八）以降の時期的段階差は勿論だが、その前提となる近世の状況も重要となるに違いない。

関連して一九九〇年代以降、近世史研究では宗教論が盛り上がりを見せ、神仏分離をめぐる知見も提起された。ここでの国家論・社会論と積極的に関連づけた把握は、明治維新期の神仏分離の研究にとっても有効であると思われる。身分的分離や宗派的分離などの独自の性格を伴いつつ、近世にも神仏分離は確認できる。しかし、分離していない局面も確実にあるため、一概に分離していたとは言い切れない。地域差・宗派差にも注意を要する。それがひいては、明治維新期の神仏分離政策への反応の差ともなったことが想定される。こうした近世と近代の様々な交錯の在りようを把握することが求められる。

明治維新期の神仏分離を理解する上では、近代化（国民国家化・資本主義化・市民社会化）の一環をなす国民国家化が重要な意味を持つだろう。日本では「神道」を結集軸とする国民国家化（国民統合）が進行した。ここでの「神道」は、神祇信仰というよりもナショナリズムの表現である。「神道」の組織的基盤となる皇室・神社・神職などを仏教と分離する必要が生じ、政策が遂行された。「神道」は様々な試行錯誤を経て、近代日本のナショナリズムとして定着してゆく。また、仏教もナショナリズムの構成要素となった。これは宗教史の問題であると共に、宗教史を超えた問題である。

神仏分離と「廃仏毀釈」によって日本人の精神構造が大きく転換し、過剰同調的特質が付与されたという安丸良夫の主張は一見奇異だが、「神道」を結集軸とする国民国家化という脈絡で捉えると、それなりに頷けるのではないか。このように近代化ないし近代史の問題として捉えることで、明治維新期の神仏分離は私たちにとって、より身近な存在となるだろう。

コメント

（林淳）

三人の個性豊かな発表を聞くことができたが、三つの発表を統合して議論を進展させることは無理だと感じた。各発表者は、自らの関心にそって固有の課題を掘り起こしており、それぞれに貴重な仕事になっているが、相互の関係性はほぼないといってよい。発表者が他の発表を気にしている素振りは、私には見えなかった。したがって私はコメンテーターとして、三人の発表者の固有の課題を尊重し、それぞれに角度をかえながら質問していくことにしたい。

桐原氏の発表では、水戸学とはイデオロギー先行の政治集団であり、排耶論は自己主張をする回路であったという二点が強調されていた。どちらも幕末思想史を考える上で重要な論点だと思われる。桐原氏には、三つの質問がある。第一に、イデオロギー先行の水戸学と、排耶論の回路は、どのような関係なのであろうか。この回路はどのように形成されたのか。第二に、排耶論は、廃仏毀釈にはどのようにつながったのか、つながらなかったのか。これは、桐原氏の直接の関心ではないかもしれないが、見通しを聞かせてほしい。第三に、近世前期のキリシタン禁制の時に、キリスト教は邪教だという反キリスト教の言論が出てきたが、その時の議論と幕末の排耶論との違いは、どこにあるのか。

上野氏の発表のよさは、近世宗教社会史研究と近代宗教史を関連づけることをめざし、近代の神仏分離・廃仏毀釈研究、国家神道研究で問題になった点（問題にされずに見過ごされた点）を再検討しようとしている点である。発表のなかで印象的であったのは、二点ある。第一に、近世宗教社会史のなかでは、近世に分離があったことが示唆されている。確かに高埜利彦は、一七世紀後期の会津藩、水戸藩などで「プレ神仏分離」があったと述べ、引野亨輔は、本山、本所支配のなかで宗教者の職分の分離があったことを指摘した。第二に、神仏分離について、①諸主体、②分離の対象、③分離のレベル、④時期差・時代差と腑分けして分析を進めるべきだと提言した。つぎに私は、二つの質問を用意した。第一に、法令上は、「神仏判然」であって「神仏分離」ではない。とすると「分離」のイメージを

先行させることは危険ではないか。神仏判然令の起草者は、神社空間の「混淆」→「判然」を求めたのであって、何かと何かを「分離」しようとしたわけではなかった。用語の成立史の問題をどう考えているのか。第二に、羽賀祥二をひきながら、神道による国民統合が図られたとあったが、本当であろうか。神道による国民統合は、一部の国学者を除き、現実の政治を動かしていた人は誰も期待していなかった。だからこそ明治憲法、教育勅語では、神道ではなく、皇室・天皇が、国民統合のために持ち出されたのではないか。

青野氏の発表を聞いて、そこに神田秀雄、桂島宣弘の名前が出てきたことに新鮮な驚きを感じ、個々の研究者が属する世代を考えさせられた。私は、神田、桂島と同世代の人間なので、かれらを同時代の研究者として関心をもつ。かれらの行なってきた業績よりも、かれらがつぎに何に挑戦するのかに関心はある。しかし青野氏の世代であれば、神田、桂島が過去の研究史上の人に見えても、何らおかしくはない。その人が、どういう世代に属するかで、同じ風景を見ていても、そこで何を感じとり、何を学びとるものが違うということなのであろう。二つの質問をしたい。第一に、今回の発表レジュメでは、図が出てきている。図を使うことは、何ら問題ではないが、最後の結論部が図で説明されることには違和感をもつ。図は、類型化するには有用だが、細部をつめるには適切なものではなく、図で大事なことを見えなくしてしまうことはある。たとえば「国家」といっても村上重良と安丸良夫では違う。また安丸と小沢浩を同じカテゴリーに入れているが、小沢は、むしろ村上に近いグループではないか。とまれ図で結論をしめすことは、やめた方がよい。結論は文章で書かれるべきだ。第二に、「民衆宗教」じたいが、研究者が対象を選択し、それを「民衆宗教」と呼ぶというものである。選択的に対象を定めていることが悪いとは考えないが、個々の研究者をこえる共通概念として「民衆宗教」を使うことはできるのか。

フロアから

＊青野発表は、民衆宗教研究を言説史的に論じたものであり、現在活躍中の研究者もその対象としていた。当日の会場にも桂島宣弘・神田秀雄両氏が参加しており、司会から、同発表へのコメントを求めたところ、以下のようなご回答を得ることができた。これは長く民衆宗教研究に携わってきた研究者による発言であり、記録に残すべきであると考え、ここに掲げる次第である。急な求めにもかかわらず、これに応じて下さった両氏には

心より御礼申し上げたい（桐原）。

桂島氏からは、「民衆宗教」とはあくまで「方法」であり、それを通して何を見るのか、その語句を選んだことによって何を明らかにするのかということであるというコメントが挙がった。その上で、自身は徳川時代のキーワードとして「神がかり」と「病気なおし」に着目し、現代では失われたそうした行為が実際に可能であったことの時代的な意義について考えたいと述べられた。

神田氏は、「民衆宗教」がサバルタンという概念に影響を受けたものであり、安丸の「民衆」研究は、「無告の民」のすがたを明らかにしようとしたものだったと論じた。さらに、如来教などでは、同一教団においても江戸時代までと近代以降では性格が大きく異なることを指摘し、その時々の「民衆宗教」が意味するところの差異を、近代仏教の展開なども踏まえた上で考えていく必要性があると述べられた。

（桐原健真・金城学院大学教授）
（青野誠・一橋大学大学院）
（上野大輔・慶應義塾大学准教授）
（林淳・愛知学院大学教授）